

日本キリスト教会大阪北教会
2016年5月1日(日) 教会創立131周年記念礼拝説教

聖書 コリントの信徒への手紙9章19～23節

09:19 わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。09:20 ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。09:21 また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。09:22 弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。09:23 福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。

説教『福音のためなら、どんな事でもします。』 牧師 森田幸男

◆今朝、このように教会創立131周年の記念礼拝を共に奉げ得ます幸いを心から感謝いたしたく思います。只今、上田長老のお祈りにもありましたように、アレキサンダー宣教師がこの日本への伝道の使命を神様から託されて来日されたのは1877年11月23日の事でした。その日横浜港に着かれました。今ならばサンフランシスコには十数時間で、飛行機ならノンストップで行けます。けれども当時はサンフランシスコを出て横浜に着くの丸一月かかりました。曾孫のジョアンナさんの書かれたものにそうあります。そしてその時、アレキサンダー一師は若干27歳、そして妻のエマさんは22歳でありました。そして横浜での日本語の研修を終えて、いよいよ大阪に来られたのは1882年のことで、教会が建てられたのが1885年5月6日のことでした。それから、131年の時を経て131周年であります。

◆今このように私たちは共に礼拝を捧げておりますが、1年前の130周年記念礼拝の時、今ここに共に礼拝を奉げている私達のこの顔ぶれを予測できた者は一人もおりません。しかし神様の導きの許、一つ一つのことが重なって私たちの今・ここがあるのであります。この一事だけでも、神様のなさることは本当に私たちの思いを越えて意義深いことを今更のように思い知らされます。皆さんご自身も、その人生を振り返られる時、それが不思議の連続、そしていまここにあるということ、**「131周年」**という事を覚える中で、自分の人生の不思議をお感じになっていると思います。その間のどの一つの出来事がなくても、私が今・ここにいることはなかったのです。

◆そのように一人の人の人生は本当に不思議の連続であります。そしてまた連綿とした人類の歴史の成果としてわたしたちはここにあります。ですから一切の理屈を越えて、一人の人の存在は、それだけで、かけがえがないのです。それで、これも今、上田長老のお祈りで触れられた事ですが、お二人はアメリカと言っても、サンフランシスコは西海岸ですが、ご出身はテネシー州です。そこからサンフランシスコまで陸路

でも結構かかります。それで今回の震災でも、肉親、兄弟を亡くした人もいますが、アレキサンダーさんとエマさんも、肉親の絆を断って、正に生き別れをして、極東の、この日本への伝道に赴かれたのであります。サンフランシスコの沖の本船まで、家族や友人が見送ってくれます。二人が本船に移ると、その人々はみな、小舟で港へ帰ります。それはまるで、本船がお墓みたいなもので、亡くなった者を墓に葬って、葬った者たちは家に帰る。「本当にそういうふうな感じがしました」と別の宣教師夫妻が書いています。ですから伝道に赴く事は、アレキサンダーさんの場合も、肉親の絆を断ってなのです。その事なしに、神の恵み福音を伝えるということは、いつの時代でもできないことでもあります。

◆最初に申しましたように、人は全て神によって造られた存在ですから、それ自体、その命は尊いのです。そしてそれは肉親の絆といいますか、父・母がいなければ私の存在はないわけです。ですからこの命は尊いのです。今日遅ればせながら、『130周年記念誌』ができました。この最後の文章は吉元長老のもので、もし誕生の時、おばさんの一言がなかったら、自分の存在はなかったかもしれないということを書いておられます。ですから、この与えられた命が尊くないはずはないのです。そうなのですけれども、その父、母、兄弟姉妹、友人達とも別れての宣教への旅立ちです。エマさんのお父さんはずいぶん弱っておられて、「もうこれで、あなたと会うことはないだろう」と言われて、エマさんを送り出したというふうに書かれています。そのように、肉の絆を断って、生き別れをして、伝道に赴かれたのです。

◆27歳で来日されたアレキサンダー師が、ハワイで召されたのは52歳のときです。その間、アメリカに帰られたのは2〜3回、休暇の時だけです。エマさんは子供の教育のためにアメリカに戻られたので、最後の数年は一人で過ごされるのです。体も弱ってハワイで療養されますが、そこで召されます。休暇でアメリカに帰った時、神学校の同窓生から、「日本に行ったら後悔はないか」と訊かれた時、「もし神様が百回の人生を与えて下さるなら、私は百回とも日本の伝道に捧げて悔いはない」と答えたと言われます。曾孫のジョアンナさんがそう書いておられます。

◆繰り返し申しましたように、この肉の命はそれ自体で尊いのです。しかし、この命に限界がある事は誰も経験し、わが身に起こることです。その肉の絆を断つことができるというのは、たとえこの肉の命は失せても、神の恵みによって、私達は永遠の命に与るのだ、与っているのだとの確信があるからです。そしてこの霊の命に終わりはなく、信仰による復活の主との交わりにおける命に生かされるのです。それ故に、肉の絆を断って、生き別れして伝道に赴く。そして何十回の人生でも伝道に捧げて悔いはないというのは、正にそのような救いの恵みに与った者の幸いだと思います。

◆それにしても、人間は罪深いなあと思わせられる新聞記事が昨日ありました。先週紹介したのは、崩れた建物に挟まれて、死を覚悟した者が助かって、テニスサークルの後輩が玄関口で亡くなっていたという記事でした。「その後輩の分まで、自分は生きる」のだという非常に良いドキュメンタリーでした。昨日の新聞記事は、6歳と4歳の息子を持つ32歳のお母さんが、軽自動車で何日か車内泊して、もう大丈夫かと思って家に戻ったら、なんとそこで4人組の空き巣と鉢合わせしたという記事です。もう地震のこわさどころではなくなって、お母さんがおられる大阪に引っ越してきたという記事です。みんなが助け合っている時に、空き巣に入れますか。こんなことができ

るのが人間なのですね。愚かというか、罪深いというか、そういうことで、「うーん」となったわけです。

◆そして今日、ご一緒によんでいますコリント前書 9 章 19~23 節はいうまでもなく、キリスト教の歴史の中でも第一の伝道者・パウロのものでした。」この人は賢い人でした。パリサイ派のエリートでした。この人は、「邪教・キリスト教」の存在が許せないということで教会を迫害し、多くのキリスト者を死に追いやりました。ところがダマスコ教会の迫害に向っていた時、復活のキリストに出会って、うちのめされます。彼は、それ迄、先頭切って歩いていたのですが、人に手を引かれてダマスコに入って行き、そこでキリスト者に出会います。ダマスコのクリスチャンたちも、当初、パウロを受け入れることに抵抗を覚えますが、復活の主の説得されて、彼を受け入れます。そのようにして、パウロはダマスコで洗礼を受けてクリスチャンになりました。そんな経歴の持ち主のパウロが、どうしたらその罪を償うことができるのでしょうか。

◆そんな経歴を持ったパウロがこう言うのです。「わたしはだれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです」と。この「だれに対しても」という表現は、「どんなことからわたしは自由な者です」という意味もあります。ということは、今申しましたように、パウロは人間の知恵に豊かであっても、神様の本当の知恵から遠かったので、教会を迫害しましたけれども、そういう過去の過ち、償えない過ち、そんなものがあれば人間は自由になれっこないのです。けれども、そのパウロが、「わたしは誰に対しても、いかなる事柄からも自由なのです」と言います。「いかなる事柄」の中には、「自分自身に関わる一切の事柄」も入ります。自分自身からも自由にされる時、人は、はじめて、すべての人の奴隷になることができます。

◆この姿勢・態度は、イエス様ご自身の姿勢・態度に他なりません。福音書に繰り返し記されている「イエス様はすべての人をいやされた」という時の「いやす」という言葉は「仕える」という意味が第一義だと、何度も申してきましたが、神の独り子であられるイエス様は、すべての病める人に、神様に仕えるように仕えられたのです。パウロは、そのイエス様に捕えられ、その恵みに与って、罪の赦しを受けました。ですから、パウロが、洗礼を受けてキリスト者にされた時、肉の命に生きるパウロは、死んだのです。神の憐みによって、復活させられ、再生されて、霊の命に生きる者とされたのです。わたしたちが受けた洗礼もそうなのです。肉の命は、遅かれ、早かれ、終わるのですけれども、わたしたちは洗礼において、肉の命から、霊の命に移されたのです。まさにそのような経験をパウロはしたのです。そのようにして、本当に自由が与えられました。

◆今日の「牧師の落穂拾い」はわたしが神学校以来読み続けている本から取りました。カール・バルトの言葉です。「ここに一人のキリスト者が居るという事実は、即ち、真の自由を与えられた人間が居るという事実は、聖霊と処女マリヤからイエス・キリストが生まれ給うたという奇跡よりも、また世界の無からの創造という奇跡よりも、決して小さい奇跡ではない。」ですから、「一人の人間がキリストに捕えられて、バプテスマを受け、キリスト者になるということは、どんな奇跡よりも大きな奇跡なのです」と言っているのです。それでパウロは「わたしはだれに対しても、いかなる事柄からも自由にされた者です」というのです。わたしたち人間は、自助努力で、自分から自由になるこ

とはできない者なのですが、パウロは、「自分は死にました。そして自由になって、すべての人の奴隷になりました」と言うのです。

◆この世界には、様々な研究のために、生涯をかけている人は幾らもいるわけです。こういう人たちが持っている熱心、一途さに、クリスチャンの熱心と一途さが負けるならば伝道はできません。「本当にその存在がどんな恵みの奇跡よりも大きい奇跡なのだ」と言うのであるならば、それにふさわしい姿勢が、洗礼を受けたクリスチャンになれば嘘です。パウロ今日のところの最後に「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それはわたしが福音に共にあずかるためです」と言っております。これも、「福音のためなら」という訳は「目的的」ですが、この言葉にも2つの意味があります。「福音に基づいて」というのがもう一つの訳です。つまり、「福音に基づいて、福音のために」どんなことでもしますとの意味合いです。そしてパウロは主に従って、福音宣教に身を捧げ、殉教したのです。ですからパウロの伝道には説得力があったのです、イエス様の伝道に説得力があったように、そのイエス様と一つにされた者として、その御心のままに生きることが肝要です。

◆今年の主題聖句は「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」であります。これ以上の使命はありません。父なる神様から遣わされた主イエス様の伝道の姿は、聖書に証されている通りです。そしてこの福音のためには、アレキサンダー宣教師ではないですけれども、肉親の絆を断ち、生き別れしてこの極東の地に赴き、そして52歳の若さで召されるのですが、このような伝道者の尊い献身がなければ、この北教会はなく、私たちの今のこの信仰の幸いもなかったのです。

◆私たちは本当にイエス様の死に与るバプテスマ、イエス様の復活に与るバプテスマを受けた者です。この洗礼一つでわたしたちは、生きることも死ぬこともできます。そういう幸いに私達は与っているのです。そういう者として私達は今、この131周年という時を迎え、洗礼を受けた者として、神の恵みに与った者として、そして主イエス様から無類の伝道の委託を受けた者として、今一度、献身しようではありませんか。この献身への招きが、今年私たちに与えられたイエス様の委託の御言葉だと思います。「あなたがたに平和があるように。」この一言でわたしたちはどんな状態に陥っても、神様の平安の只中にあるのです。常にある。死ぬ時もある。死の後もある。この平安に与りつつ、イエス様がかつてなさり、今なさり、これからもなさる伝道に、私たちも与るのです。その御言葉をわたしたちは与えられているのです。そのような思いで、主にあって一つとなり、一つの体につながる者として、イエス様の御言葉を本当に真に受けて、わたしたちが接するすべての人が、この恵みに与ることができるように身を献げたいものだと思います。

◆お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

私達は愚かな者であり、怠惰な者であり、高慢な者であり、また罪ある者でありますけれども、あなたはそのような私たちに変わることをない恵みと真実を貫いて下さり、今に至るまで支え導いて来て下さいました。そのことを覚え心から感謝いたします。どうか御心に適う伝道に与るわたしたち一人一人また、北教会であらしめてください。この祈り、主イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン